



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1994 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

家庭は社会の原動力

(教皇様は、イタリアの地方行政委員会の方々を迎えての講話で、全て社会政策は家庭に焦点を合わせるべきであると話された。)

★ (…) 最近の経済情勢の悪化は地方の中小企業に打撃を与え、そこで生計を立てる多くの家庭を不安に陥れています。何らかの政策が必要です。経営縮小の動きには失業と流動性の問題が伴います。一家ぐるみ住み慣れた地域や習慣を離れ、仕事を求めざるを得なくなるのです。

さらに、多くの若者たちが定職を見つけれず、安心して将来の計画を立てることもできない状態です。従って長い間親の援助に頼らざるを得ず、家庭内に緊張状態が起きることもしばしばです。もっと心配なのは、若者が自らの新しい家庭設計をやむなく先送りしなければならぬという事実で

す。ふさわしい仕事を見つめるのがほとんど不可能な時、アルコールや麻薬という偽パラダイスがとても魅力的に見え、逃避に走る条件を作りかねません。こうして個人的、社会的な問題で痛め付けられた人間社会に、暴力と青少年犯罪のはびこる下地が生じます。

★ 家庭は全ての社会計画の中心

このように困難な状況の中には、難しくはあっても必要不可欠な任務を果すことが望まれています。すなわち家庭とその基本的な必要に、特別な注意を払うこと。国際家族年を教会は特別に省察と祈りのテーマとして取り上げ、社会の基本となる核にふさわしい尊敬に注目するよう呼びかけています。皆さんにも、全ての行政担当者の方々にも、「家庭が人とし

ての尊敬を保ちつつ、基本的な必要を満たし得る条件を整える」使命が委ねられています。実際、困難な家庭は「社会生活に充分加わることもできず、あらゆる面で圧迫されています。」(九四年世界平和の日のためのメッセージ)です。ですから、現代の最優先事項の一つとして、家庭を規律正しい社会発展の原動力とすべきです。あらゆる社会・政治政策の中心は家庭です。家庭の権利を常に尊重し、可能性を正しく評価すべきです。家族という単位を持つ実際の可能性を考へるなら、人間的にも物質的にも全てを皆の利益のために、効果的かつ理にかなった方法で用いることができるでしょう。

★ 従って、地方共同体を構成する各方面の人々の緊密な協力と参加が必要であることは明らかです。そこには深い精神的、文化的なものがなければなりません。今日では、それは歴史の新しいページを開くこととなります。伝統に育まれた地域でも、今は移民の受け入れや観光客の増加に伴い、異文化に門戸を開いています。

現代、文化上の問題はローマのような大都市でも、中小の都市でも起っていますが、それはまた、異なっているにもかかわらず、二つの現実をつなぐ価値観を浸透させなければならぬことを示しています。一方にはコスモポリタンな大都會があり、そこでは多くの社会集団が、無数の、多種多様な人々との出会いを可能にしてくれますが、日々の生活のテンポの早さで出会いも束の間に終りかねません。他方、昔ながらの結び付きの強い、平和で穏健で周囲の人や環境を気遣うしきたりの残る地方小都市は、孤立化する恐れがあります。

政治と社会をつかさどる全ての人々に訴えたいのは、家庭に注意を払うこと、家庭の必要を満たす条件を整えることです。なぜなら、家庭こそは正しい社会発展の基盤となるのですから。

伴うべき文明の進歩を促し、将来を担う世代に確かなもの、大切なものとして示すことのできるものを与えてくれるでしょう。深い倫理的・道徳的な信念に動かされ、弱い人々や寄り添えない人々の世話にいそしむボランティア・グループの活動も、市民共同体を強める働きをするでしょう。ですから、地域のあらゆる人

的、倫理的、文化的資源、なかなか多くの人々の努力と希望を支えているすばらしい信仰の賜を総動員するべきです。

★ キリスト教歴二千年目は何もう目の前です。信者にとつても、善意の人々にとつても、それは一種のゴールです。歴史的にも精神的でもあるこの出来事は、とりわけキリスト教の心臓部であるローマに関わっています。

イタリアの司教方宛てに出した最近の書簡で私は、「紀元二千年を前に、全教会、特に全ヨーロッパは大いに祈らねばならない。祈りの波が各教会、国、大陸を越えて一つになるように」と書きました。さらに、「祈りとは、常にある種の「告白」であり、神が歴史の中におられ、個人と民族に働きかけられることを認めることである。同時に、祈りは神と人の親しい一致、人と人との結び付きを促進させる」(8番)のです。これはキリスト信者について述べたものですが、全ての人に当てはまります。実際、現代のように不確実性に満ちた時代、刷新への願いが広範囲に及んでいる時代には、神や霊的な価値といったことから目をそらしてはなりません。宗教的な次元をなくしては、真により良い社会、誰でも暖かく迎え入れ、自由で協力的な社会を築くことは不可能です。(…)

(九四・二・五)

主は「ご自分の人々」を望まれる

(教皇様は、福者ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲルの教えに関する神学研究会議の参加者をお迎えになった。)

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。
福者ホセマリア・エスクリバーの列福から一年余が過ぎ、ローマ聖十字架大学神学コンベンションに際して、皆さんに歓迎の挨拶をすることを嬉しく思います。
(…)

世界と教会の歴史は、人間の自由な協力と共に父なる神の救いの計画の成就に全てのものを向かわせる聖霊の働きを通して展開します。この神の摂理の明らかなる表れが、何世紀にも渡ってキリストに忠実な男女がつねに存在していることです。キリストは、彼らの生涯とそのメッセージにより、歴史の様々な時期に光を与えておられます。これら神の光を受けた人々の中でも福者ホセマリア・エスクリバーは卓越した存在です。なぜなら、列福式の日にも強調しましたが、彼は聖性への普遍的召命と、専門職が各人の日常生活の中で持ち得るキリスト教的価値をこの世に思い出させたからです。

神の子は自らの手で働かれた
靈魂の聖化に加えて聖霊の働き

は、キリストによって託された任務を教会が効果的に遂行するよう、教会の絶えざる刷新を目指しています。教会の最近の歴史の中で、この刷新の過程には注目すべき基本的な点があります。すなわち第二バチカン公会議に集まった司教たちは、人々に、文化に、そして個人の生活に決定的な影響を持つような方法で、世界に向けて福音を述べ伝えるため、教会の秘義の本質について改めて検討しました。公会議文書とそれに続く宣言の特徴は、キリストによって私たちのために成し遂げられた救いを完全に認識することでした。この認識から、公会議文書とそれに引き続いて教導職が強調した福音宣教の使命感、すなわち私自身が最近、回章「真理の輝き」で述べた使命感が生じてくるのです。
聖霊の導きのもと、今日教会は人間存在のあらゆる面に関わるキリストの贖いに仕えるべきであるという深い認識を持っています。それは、知的・霊的な進展の過程を経て徐々に生まれてきました。福者ホセマリアのメッセージは、この方向へと人を駆り立てるカリスマ的力の最たる表れの一つです。それは贖い主キリストの恩寵がもたらす輝かしい普遍の力に独

自の理解を示したことから生じるのです。オプス・デイ創立者はその説教の一つで次のように述べています。「キリストの熱意に無関係なものは何もありません。神学的に説明するならば、ひとたび神のみことばがキリストが人々の中にお下りになり、飢えと渇きをおぼえ、自ら労働し、友情や従順を学び、苦しみと死を経験されて以来、厳密に言って、善良なこと、気高いこと、あるいは善でも悪でもないことさえ、神とは全く無関係であるとは断言できなくなりました。」(ホセマリア・エスクリバー「知識の香」p.112)

この深い確信に基づいて、福者ホセマリアは様々な社会条件にある男女に呼びかけ、自らを聖化するようになり、また日常生活を聖化することにより他の人の聖化にも協力するよう導いたのであります。その司祭職において、彼は全ての靈魂の価値と良心を照らし、人格とその尊厳の擁護に対する真摯で積極的なキリスト者としての献身に目覚めさせる、福音の持つ力を深く認識していました。福者ホセマリアは「道」の中で次のように書いています。「今日の世界的な危機とは聖人の不足である。神は、社会の各分野で働く「自分の人々」をわずかずつでも望んでおられる。そのような人々がいるなら、「キリストの王国におけるキリストの平和」は実現するだろう。」(p.30)

な福音宣教に召されているこの時期に、福者の教えはどれほどの力を持つことでしょうか！ 今回の研究会で、皆さんはこの霊的な教えの様々な点について考える機会をお持ちになりました。私は皆さんがこの仕事を続けられるよう望みます。なぜならホセマリア・エスクリバーは、現代の教会の歴史における他の偉大な人物のように、自身も神学的考察に超自然の直観を与えたとと言えるからです。事実、信仰と文化の関係を黙想する上で掛け替えない役割を持つ神学研究は、福音書にのっとり、キリスト教信仰の偉大な証人たちの経験に鼓舞されることよって発展し、豊かなものとなります。福者ホセマリアが偉大な証人の一人であることは疑いありません。

しかし福者ホセマリアの重要性は、そのメッセージのみならず彼がもたらした使徒的現実にあることを忘れてはなりません。創立以来65年、信徒と司祭の分かたつことのできない統一体であるオプス・デイ(属人区)は、あらゆる職種の人々にキリストの救いのメッセージを告げ知らせることに貢献してきました。普遍教会の牧者としての私にも、この使徒職のこだまが伝わってきます。私はオプス・デイの全メンバーが、生涯にわたって創立者を励ました教会への奉仕の精神を忠実に受け継ぎ、使徒職に堅忍することを望みます。皆さんと、福者ホセマリアの模範と教えによって霊的励みを受けた全ての人に、心からの祝福を送ります。(九三・十・十四)

キリストは教会を ペトロの上に立てられた

教会シリーズ 20 (続き)

5 ペトロは教会の土台
マテオ福音書の中のペトロを教会の土台として表現している箇所(16・15・18)は、多くの論争的になりましたが、それについてはここでは繰り返しません。また否定の対象にもなりません。それは福音と聖伝に基づいた証拠によるのではなく、ペトロとその後継者の使命と権能を理

解する難しさによるものでした。詳細は省きますが、ただ、マテオが記すイエズスの言葉は、ギリシャ語とラテン語の訳にあっても疑いもなくセム的な響きがあり、ユダヤの文化や宗教的意味だけでは明らかに説明のつかない新しいものであることを指摘したいと思います。事実、当時のユダヤ社会では、土台の石はいかなる宗教的指導者も意味しませんでした。し

説教・講話・書簡等の抄訳

かし、イエズスはそれをペトロに当てはめたのです。それはイエズスのもたらした一大革新でした。マテオや後の記者たちが作りだしたものではありません。

6

イエズスが言われた「岩」がシモンという人物を指していることも指摘しなければなりません。イエズスはシモンに「あなたにはケファである」と言われました。この言葉の内容を考えれば、「あなた」とは何を指すかわかりません。イエズスがどなたであるのかをシモンが言う、イエズスは、教会を立てる計画に従って、シモンが誰なのかを示されました。信仰告白のあとでシモンを岩とお呼びになったのです。それは、シモンに与えられた岩の役目と信仰の関係を表しています。ただし岩の役目はシモンその人に与えられたものであり、いかに気高く、イエズスの嘉せられるところであったにせよ、シモンの行いに對してはなかつたのです。岩という言葉は永続的に存在し続けるものを表しています。従ってそれはシモンの一時的な行為ではなく、むしろシモンという人物そのものに当てはめられました。イエズスが次に地獄の門、死の力も「これに」勝てないと言われたことからも明らかです。「これ」とは教会もしくは岩のことです。いずれにせよ話の成り行きとして、岩の上に立てられた教会が壊れることはないということになります。教会の永続性は岩に結び付い

ています。ペトロと教会の関係の内、教会とキリストの結び付きが再現されています。イエズスは「私の教会」と言われましたが、それは教会がつねにキリストに属する教会、キリストの教会であつて、ペトロの教会とはなり得ないという意味です。しかし、教会はキリストの教会としてペトロの上に立てられました。ペトロはキリストの御名と力においてケファ(岩)であつたのです。

7

福音史家マテオは、イエズスがシモン・ペトロと他の弟子たちに説明するために別のたとえを使われた、と記しています。「私はあなたに天の国の鍵を与えます。」(マテオ16・19) すぐわかるように、聖書によれば天の国の鍵を所有するのはメシア(救い主)です。黙示録は、預言者イザヤの言葉を繰り返して、キリストは「聖なる者、真実の者、ダビドの鍵を持つ者、彼が開けば

誰も閉じられず、彼が閉じれば誰も開けぬ」(黙示録3・7)と記しています。また、イザヤの預言の「私の教会」と言われたが、それは教会がつねにキリストに属する教会、キリストの教会であつて、ペトロの教会とはなり得ないという意味です。しかし、教会はキリストの教会としてペトロの上に立てられました。ペトロはキリストの御名と力においてケファ(岩)であつたのです。

8

イエズスはもう一つのたとえを使い、シモン・ペトロに天の同意を得て保証・認証された普遍的で完全な権能を与える意志を示された。しかしこれは、教理に関する事柄や行動規範を系統だてて示す権能にとどまりません。イエズスによれば、「つなぎ、解く」権能、つまり教会の生命と発展に必要なあらゆることを行う権能です。この相反する言葉「つなぎ、解く」は権能が全てに及ぶことを示すために使われています。

8

イエズスはペトロに言われました。「私はあなたに天の国の鍵を与える。あなたが地上でつなぐものはみな天でもつなぐれ、地上で解くものはみな天でも解かれる。」(マテオ16・19)

カイロ国際会議に対する 教皇様の憂慮

今年9月、国連の主催によりカイロで開かれる「人口と発展」国際会議の最終案について、教皇様は懸念を表明しておられる。

教皇様は国連の人口抑制計画に對して「勇敢に」反応するよう各国首脳に要請された。この計画は家庭の将来と人間の尊厳に反するだけでなく、「国連のたいへん高貴な理想に對する裏切り行為である。」また墮胎その他を推し進

める草案は「苦い印象」と「憂慮」を与える、とも言われた。カイロ会議文書は、「世俗化され、物質的に豊かな発展を遂げた社会のある階層に典型的な生き方を押しつけようとする。」「自然と道徳、宗教の価値を大切にすると、

から、このような人間観、社会観を受け入れることはできないだろう。」

教皇様は二つの点を特に重視しておられる。文書に現れる性に関する考えは「完全に個人主義的」である、また「結婚はすでに克服されたもの(時代遅れのもの)」と考えられており、「無制限に墮胎を認めるための無数の提案がなされ、それが世界的な規模で行われている。」

「人々が幼いときから、なるべく安全な方法を使って、無制限に好き放題をする権利を認める「物の社会」、人格を尊重しない社会を考えている。」 本能のコントロールや責任感、無私の奉仕などは「時代遅れ」と考えられている。」

教皇様は各国の元首に「生命の伝達や家庭、社会の道徳的及び物的発展のよう重要な事でデリケートな問題をよく考えるよう」勧めておられる。(九四・三・十九)

不変の教え

福音宣教の使命は全ての人に

(…) 普遍的な福音宣教の使命は、教会の選ばれた人々だけのものではありません。それは洗礼を受けた人全員が、各自の召し出しの状況に応じて果すべきものです。「キリストを信じるいかなる人、教会のいかなる機関も、全ての民にキリストを告げ知らせるこの最高の義務から逃れることはできません。」(「贖い主の使命」3番)

現代においても、新しい福音宣教は昔からのキリスト教の伝統ある国々の間でさえ、必要となっています。人々は世俗化と宗教上の相対主義の波にもまれ、信仰を根本から脅かされているのです。

従って、教会の子らには大きな責任が課せられています。キリストのメッセージを自らの生活と生き方を通して訴えるにとどまらず、宣教の第一線で働く人々、それゆえに信仰を同じくする兄弟姉妹たちの祈りや犠牲、霊的・物的な分利を有する人々を、寛大に助け支えるべきなのです。

何よりもまず、新たな使命の自覚はキリスト信者たちに首尾一貫した証を義務づけます。新回章「真理の輝き」に述べたように、新たな福音宣教は「宣言された言葉のみならず、生き方の証を伴った言葉という賜によって実現する

ならば、持てるかぎりの力を発揮できることでしょうか。」(105番) 人は言葉を通じてと言うよりも、その生き方を通じて、宣教師なわけです。経験に照らしてもよくわかるはずですが。「数多い神の民の中でもひとときわ気高い聖性に満ちた生活は、目立たず時には気づかれぬまま、最も近づきやすく魅力的な道となつて、真理の美しさ、人を自由にする神の愛の力、どんなに困難をきわめても、神の法に無条件に忠実を保つことすばらしさなどをたちどころに悟らせてくれます。」(同)

教皇様の動き

(四月～五月)

● 4・10 聖ペトロ大聖堂にて、アフリカ臨時シノドスの開会宣言。同日、レジナ・チェリの祈りの後、ルワンダの地域紛争を憂いて平和へのアピールを述べられた。

● 4・20 「生命に一致し、キリストのみわざと超越の秘義に一致して働く人はキリストの使命にあらずかっているのです。」水曜日の一般謁見で、教皇様は信徒の労働が使徒職となり、霊的に世界を

変え得ることを力説された。

● 4・22 教皇庁聖職者省主催の「司祭職への信徒の参加」についてのシンポジウムで、「信徒と司祭は、召し出し、身分、役割、賜、責任などの点で異なっています。信徒が司祭の役割を肩代りすることはできません。それよりも、キリスト信者全員の努力を、絶え間なく響き渡る「キリストの声」に変えなければなりません。」

苦しみ・希望・聖性

病者に兄弟的な支援を

苦しみのさ中でも信じ続けるといふのは、容易なことではありません。挫折感を覚えたり、反抗心が起こったりして、神の助けを疑うこともあるでしょう。キリスト信者の共同体は、特に有志の助けを借りて、こうした苦難の内にいる人々を兄弟の心で支え、希望の理由をなくさぬよう、病人が聖パウロのように「キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそう」(コロサイ1・24)と云うことができるよう、「今あなた

● 4・24 ザイル人の若い殉教者と2人のイタリア女性を祝福された。ミサ中、レジナ・チェリの祈りの際、3人の新しい福者にちなみ、羊のために命を惜しまぬ良い牧者と、子供に生命を与える女性の姿を対比してお話になった。

● 5・12 「司祭叙階」という使徒書簡を発表し、司祭叙階が男子のみに限ることを確認された。「私は教会が女性に司祭叙階を授ける権限を有していないこと、またこの判断は全教会の信者が最終的な判断として受け入れるべきであることを宣言します。」

● 5・22 聖霊降臨の日、病室の窓辺に顔を見せた教皇様は、集まった人々に向かって話しかけ、感謝を表された。「聖ペトロ広場の方の窓は閉ざされてしまいました。が、幸い、この病院の窓がありますから……。」

● 5・29 病院からアンジェルスへの祈りをし、世界中の家族のために苦しんでいる、と仰せになった。「どうして教皇が再び病院にいて苦しんでいるのか、わかって下さい。よく考えてください。」(教皇様は世界中の家族のために、入院中の苦しみを捧げになっている。)

主は私たちの間に

(…) 「私にとどまれ。私があなたたちにとどまっているように」(ヨハネ15・4)という言葉は今、聞きました。福音書の朗読はぶどうの木と枝のたとえです。この一節は、生きるキリスト、命を与えるキリストが聖体に現存されていることを考えれば、よく理解できるではありませんか。

キリストはぶどうの木で、選ばれたぶどう園、すなわち神の民・教会に植えられました。聖体のパンの秘義を通して、主は私たち各自に仰せになります。「私の肉を食べ私の血を飲む者は私に宿り、私もまたその者のうちに宿る。」(ヨハネ6・56) キリストの命は、枝を養い実を結ばせる樹液のように私たちに届きます。キリストとの真の一致がなければ、私たちはキリストを信じ、キリストに養われているのですから、超自然の命は私たちにではなく、実を結ぶこともできません。(…)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講話等を解説したものにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料七百円 二千部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393